

2002年4月23日第三種郵便物認可（毎月3回5の日発行）
2004年10月5日発行 SSKW 増刊 通巻第304号

SSKW

海から海へ

No. 4 2004. 10. 5 【編集人】

特定非営利活動法人 海から海へ

〒182-0024 東京都調布市布田1-43-3

オリエントマンション108 うつわ和季内

TEL & FAX 0424-41-2958



とりたちの午後 910x1167 © Mizuki Tanaka 1998

海から海へ は、瑞木さんの60余点の絵がいつでも誰でも見られるように、みずき美術館を設立する準備をしています。ご協力をお願いします。

8月のハワイ

阿部公輝

バングラデシュからの大学院留学生S君と、情報工学の国際会議でホノルルへ行った。

S君は、成果をまとめた研究論文が難しい査読に通って発表できることになったとき、「僕は行けないでしょう。ビザがとれないから」と言う。イスラム国家の人がアメリカ入国ビザをとることはひじょうに難しいことは知っていた。しかし、国によらず、学生、教員、研究員によらず、成果を持ち寄って話し、聞くのが国際会議ではないか。

私は妻の「アメリカ大使に手紙を書いたら？」のことばに、なるほどと思った。国は人の集まり。代表であるパーカーさんに話せばいい。早速手紙を書いた。反応はなかった。しかし、S君は大使館での面接から帰って、「提出書類をちゃんと見てくれました。大丈夫だと思います」と嬉しそうに報告した。アメリカ総領事から大学に私宛ファクスが届いていたのを知ったのは、会議が終わって日本に帰ってからのことだ。気持ちは通じていたのだ。

8月の真珠湾。青い海に沈む戦艦アリゾナの真上に建てられた白亜の慰霊場で思った。彼らは1941年12月8日のことを忘れない。そして2001年9月11日のことを忘れない。ならば、ヴェトナムで自分たちがしたこと、イラクで自分たちがしていることも忘れることはできまい。同じように私たちは1945年8月6日のこと、8月9日のことを忘れない。ならば、アジアの国々で自分たちがしたことを忘れることはできまい。

過去と現在、死者と生者、自己と他者、此处と彼方。すべてはつながっている。研究と実践はつなげる活動である。過去から未来へ、生死、自他、ここからかなたへ。当たり前なのに気づくために。



事務所が変わりました

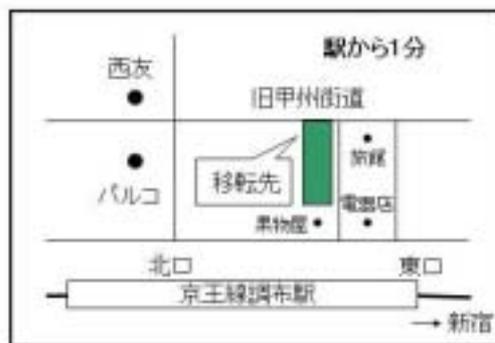
9月5日の臨時総会にて主たる事務所の移転が決まり、9月17日に移転しました。よろしくお願いいたします。

移転先

〒182-0024 東京都調布市布田 1-43-3

オリエンテーション 108 うつわ和季内

電話とファクス、メール、ホームページアドレスは以前と同じです：
0424-41-2958、office@umi.or.jp、http://umi.or.jp



みずき美術館をはじめるために —作品展示しています—

9/18~10/31は、移転先にて以下の作品を中心に展示しております。どうぞお気軽にお出かけください。

作品	タイトル	サイズ(mm)
3.	静物	350x270
10.	パレットを持つわたし	530x455
12.	お花畑	606x727
20.	花とコップ	606x727
22.	花と人形	606x727
28.	ノンちゃん和ブルちゃん	606x727
36.	もみじ山のねこ	727x606
37.	自転車に乗った矢口さん	530x727
39.	ドライブ	910x1167
40.	ねこの原っぱ	1303x1620
41.	秋のサファリパーク	1167x910
44.	バーベキュー	606x500

火・水・土 13:00 17:00 open

月・木・金・日・祝 closed

チャリティコンサート<海から海へ>

～庄野真代さんをお迎えして～

調布の街の人や電気通信大学の学生たちが、美術館を作る計画の私たちを応援し、チャリティコンサートを開催します。

コンサートにおいでください。

2004年11月3日(水) 文化の日

午後4時30分開演

場所 電気通信大学 講堂

入場料 3,000円(全席自由)

問合せ 0424-82-2775(うつわ和季)

主催

チャリティコンサート<海から海へ>実行委員会

(詳細は添付のちらしをご覧ください。)

シラキュースの報告(2)

阿部愛子

2004年4月27日午前9時。春雨の中、私たちはニューヨーク州立シラキュース発達サービス事務所(OMR)を訪問した。案内はセンター・オン・ヒューマン・ポリシーの副所長ボニ・シュルツさん。歩きながら、この場所が大きな入所施設(約1000人の知的障がい者がいた。)のあったところと説明を受ける。

出迎えてくれたのはスタッフの一人、ドリス・ムーアさん。8人の障がいを持つ人たちも集まってきてくれている。彼等の話を聞くのが一番と言ったボニさんのアドバイスと計らいである。ドリスさんは彼らの個別支援や自己決定の支援をしている。

彼女の説明では、「コミュニティに住みたかった」「自分のことを自分で決めたい」「選挙の権利がほしかった」と言う障がいを持つ人たちが、10年くらい前から活動をはじめているとのこと。今では「自分たちが障がいを持つ人をトレーニングするんだ」と、アメリカでも先駆的で啓蒙的な活動を続けている。世界中にあるピープル・ファーストとよく似ているようだ。

代表の一人、マイケルさんは1986年シラキュース大学でセルフ・アドボカシー(権利擁護)の州会議を主催した一人である。その後ニューヨーク州はこのような活動を援助するように

なり、現在では5つの同レベルのグループ活動が行われていると言う。

草の根レベルではあるし、まだまだこれからと言うものの、1980年代から同大学のスティーブ・タイラー教授等のコミュニティ・インクルージョン研究の助成金プロジェクトでマイケルさんは雇われ、「セルフ・アドボカシーを学ぶこととセルフ・アドボカシーを他の人に教える」という役割を担った。彼はセンター・オン・ヒューマン・ポリシーで働き、論文を執筆している。これからはセルフ・アドボカシーのスキル、コンセプト、アイデアを近辺のコミュニティ・カレッジで広げたいと語った。

マイケルさんの話から、社会的弱者の運動の歴史があるアメリカと日本との違いを感じる。障がいを持っていることが高い価値におかれ、今では障がいのある方を援助していることが企業でも個人でもステータスを意味するという。『ソーシャル・ロール・パロリゼーション』の著者ウルフェンスバーガー教授の思想を思い起こす。障がいを持つ人から学び、社会変化が始まっている感を強くした。

他の人からも話を聞いた。夫と自分の家で暮らすというサリーさんはフルタイムで仕事をしている。生活をサポートするエージェンシー(日本では生活支援センターや事業所に該当)を4回変えたと言う。自分に合ったところを自分で決めることができる環境があるからなのだが、セルフ・アドボカシーが大きな影響を与えているからと思う。ペリーさんは少し前までは一人でしたが、医療の問題で今はナースホームにいる。ひとり暮らしを希望していると言う。しかし、今のところサービスが取れないそうだ。(注:受けられないというような受身の言い方をしていない。)他の方々も、「人的・社会的資源を持ち一人でアパートに住んでいる」、「一人は嫌なのでグループホームにいる」など、自立生活は当たり前と考えている。18歳以上になったら親と同居はありえないとの認識があるからだ。

生活の中身については「リハビリで作業をしているが、フラ



ストレッチがある」
「エージェンシーは嫌い」などの声も聞かれた。以前より十分なサポートができてきた一方で、ステップアップのための困難はこれから解決していくと言う。

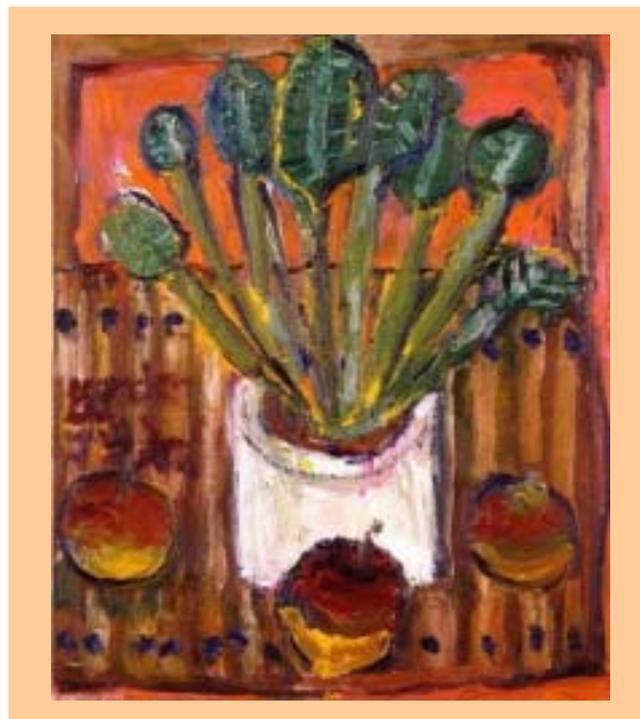
ドリスさんは行政に、グループ・ホームへの支援費をもっと柔軟に使えるよう、コミュニティを中心に考えていこうと働きかけたことや、当事者中心のミーティングを行い、その考え方で当事者がどういうふうにしたいかのプランを行政に見せることなどを進めてきたとのこと。それによって、たとえば、変化のステップは小さくしながら、変化のための優先順位をつけていき、どういったサポートが今必要なのかと並べ検討し、それに伴うお金のかかり具合を算出するなど、現実を優先にプランの立て方を工夫し、支援を見なおしてきたとのこと。ニューヨーク州の公的な支援費を取ってきて、当事者のいろいろなニーズを集めて、1つの予算を個人に合わせたプランにして支援をしていく。一つひとつが自己決定であると力強く言う。

マイケルさんをはじめ皆さんははっきりと自分の考えを言う。「自分で自分のことを決めることができない」ことほど、つらいことはない。自分を大切にしていることが伝わってくる。障がいを持っていることで不便はあるかも知れないが、かけがえない自分自身を誇り高く生きることが教えていただいた。

ここにいと、日本の現状を思い起こさずにはいられない。ここではもはや入所施設を思い出させるものは何もない。しかし、他のアメリカの施設同様、壮絶な地域移行が行われたのだろう。アメリカでもこのような頑丈な建物と空調設備の整った施設を望む親たちがいたからだ。

日本ではまだ施設を作っている。子どもの自立を考えると言いながら、施設に入れる親がいる。子どもは施設を望まない。障がいをもつ人に丁寧に問えば、地域で暮らしたいと答える。そのことを理解し、力になれるのは援助とは何かを知っている少数の人たちでしかない。専門家のドリスさんが彼らから信頼されている姿を見ると、本当の安心感がここにあることを知る。私たちはドリスさんから学ぶことができるはずだ。シラキユースの実践は多くの示唆に富んでいる。

外に出ると、雨が上がっている。午後から訪問の予定であるエージェンシーは新しい支援を始めたところと聞いている。刺激的な旅を用意してくれた真帆さんに感謝し、期待を膨らませます。



サボテンとリンゴ 318x410 © Mizuki Tanaka 1986

編集後記

「こういうことがあると、ぼくはエルザに、そのときのやりとりを話して聞かせずにはいられないのだ。... 彼女との結婚生活のあいだは、つねにそうだった。... 言われたことを言うことは、実は言われたことをもう一度言うということではない。それは生きられた経験をもう一度生きなおすということであり、言われたことを繰り返して言う時間のなかで、言葉はあらたに生み出されていくのだ」(パウロ・フレイレ『希望の教育学』里見実訳 太郎次郎社)

本法人の心理相談員が朝9時から夜9時の集中講義を5週間受けて学芸員の単位をとった。パウロ・フレイレはそのときのY先生の講義で紹介されたブラジルの教育家である。(輝)

年会費：正会員 3,000 円以上 協力会員 1,000 円以上
賛助会員(団体) 30,000 円以上
振込先(ご寄付の場合も下記宛にお願いします)
口座名称：特定非営利活動法人 海から海へ
郵便振替：00110 - 0 - 684539 または
銀行口座：みずほ銀行 調布支店 普通預金 8082621

特定非営利活動法人 海から海へ
http://umi.or.jp office@umi.or.jp
2004年10月5日 海から海へ No.4
編集責任者 阿部公輝
〒182-0024 東京都調布市布田 1-43-3
オリエンテーション 108 うつわ和季内
Tel & Fax 0424-41-2958
発行所 〒157-0073 東京都世田谷区砧 6-26-21
特定非営利活動法人障害者団体定期刊行物協会
定価 200 円
無断転載禁止